尾張廼家苞

二之上

愛知県文化会館

505247

A911
イ
2-2-1

尾張廼家苞二

新古今集

秋哥上

文治六年女御入内屏風に

後徳大寺左大臣

いつもきく麓の里とおもへどもきのふにかはる山おろしの風

ふもとの里にて、風の音ハいつもきくおとなれども、
その風の音の、きのふとハかはりてさむしとぞ。

百首哥の中に　　家隆朝臣

きのふだにとはんと思ひし津国の生田の杜に秋は来にけり

本歌ハすなほにとく〳〵用ひめで津国のいくたの里の秋の物にこそ何なし

すきのふたよとしてむかしまんえ宗。先生ハ本歌よりいへる

ちらくよりてうくのやくと鮮なく風なるよ此哥ハしもも例そたゝへられたりハいゑ本歌よ見すなくとくましゆゑとあるその人のすゝる夏の日さへとみゆ。しきのふたよとし立秋の日のんきんたゝ何と見すき夏の日さへんとむかしハ秋ハ来ぬわきハいよ。物の哀れなるへきれを必とふやしとゝくうりのすな何れうとこうくれ。かゝる哥の哥よ味しきへたる勝景のさハなましとあんれたるハあはれの給ひけり。上府の人物は四季の題よ述懐と名所名勝山のんなくよし歌人せさへ。こんすゞ悩る和哥すきとぞせまき事之

最勝四天王院障子に高砂かきたる所

秀能

吹く風の色こそ見えね高砂のをのへの松に秋はきにけり

上二句秋来ぬとめにハさやかに見えねどもの音こそ風ハ色見えねどもおとと。本歌よりなるハあらず。さとへて出哥そとしおもしきこゆるハいかにもすて

必ず成てう色つしくもあらでかくしきこえや一首のさハ吹く風秋の色とふハこゝろえね高砂の尾上の松よ。その声ハ必ずあはれよ聞し秋のさと

松なる風よ秋の色のめよこそ見えねとなりねとあり。此ハ本来ハ

百首歌奉りし時

俊成

伏見山松のかげよりみわたせばあくる田面に秋かぜぞふく

松のかげよりみわたしたしハ松の梢へなどけふハ哥のかみのまさりひこ

守覚法親王家五十首哥に

家隆朝臣

明ぬるか衣手寒し菅原や伏見の里の秋のはつ風

衣しをとふよねてあるさまをかるさる。このさ清てさあり。

歌姿くらハ明ぬるかといへるかゝしの様ハ夜の明て

秋の夜風のやゝらと秋のたつ風へもうらみてハた
しかなりけり。秋のよの風といへるも、秋風のひやゝかなるさまの歌ハ寄
の詞まてかゝりさかはいかゝあらん。一首ハ、立秋のお
夜衣のあはれも秋なりとおもひてねてさめてのひやゝかなるにおどろ
きてとハ家の夜のまくらや、萩原の伏見の里の秋の夜風にも衣手の
ひゝきかゝる三四五二と
つけてよめるなり。 されとやすのすゝしきハ下のかなる歌
なり。下のかなるハ此語の風とあらはれといさゝかも隔なく、かくよくきこえたるを此浅詞ハあらすかし。

千五百番歌合に　摂政

深草のふる歌によめるを新しく里をかり付秋ハ来まちか
御句里の名に深き草の心をふくめ三句よりハよりあは
れなる草を秋の夜あはれむせひたる（野べの秋の事）を清作の
よみとりたるハたとへハ人の花をなかむる花のなかめとそ。

たとへいや。此たとへよきたとへもあらすたゞのならひめでたきもの事のせたる
語ともあらず、さのよみすりとハいさゝかみちよみすると思之ちきり
ハ縁なり。常に契約之縁すハあらす。はてぬ二三ノ句ハ弱をよすかて
ものちきりもてとふいてきたれるをよするとき
とをいへるハ此の世なりしよたらさる故や。此のせかし五も
しこたゝすして
ロし語の心をたゝみいへる哥ゆゑ精選にいるへきめらハ此哥めて
たしねめたしといはれたるよりけあらす。又あるいのほよ哥ハかくつかし
とつへともはつるなるはなきやうにまよむへしといはれたるも齟齬せりよみすりハ
攘なり。契ハ契約にて二義なるを別なりかの心の言葉しかるはあらす一首
のさハ深草のさとの草深き所をいそうの縁そともれす。契約ありて月
のとふといさゝかも従入なりしるき哥なるをいかよいかにあるへからん。

四句とこそしるかまほしき物で人すまん中をそふれ（葬の）よくのねなれ
すまふへらなり。

さきもへ入たらて言す
よきよしき哥之。

通具朝臣

あはれはいかにしのびの袖の露吹分の風に秋と来てなり
又といへるよりよりて袖の露なきことをこあたり

よけるまことハ本しいその言ハ袖袂の露に秋風たちてえたへしのそけりさしてハうつ袖の露も又いりとたへしのもんといへるまし。又ハ俗にいふいけ毛木也。

袖袂といふ事にへ気をつけたる詞也。ちりわたる由の八秋ふ決るさ八羽さまるにあるゆへ

貞親

夢路の枕のうへに不過ぬ夜半の夢をと尋ぬる秋のはつ風

涙にぬれたる枕のあたりまで秋の初風の吹来るを。
夢をと尋ぬるといひなせし也。之夢ハ秋の夜すがら
枕を尋ねあるよしの也。以上くの外に過ぬ夜半とハたく吹
来るさまを云すきまよりかよひける故なととハいふにて。
あとはかさなれとさはふたり過といふまいさく

うつ似つらし心とききぬへハたゝ吹来るさまをもてなしたらん
夢路も過去ハせんさまりなんもういハ流する
ままあるをたくへりたまぬれなましき詩にハうつくつかう書のかへ
新なハめつらしきるやまり過といふに似つかしさにあるもめつらしき
まうてのす
まやあらん

顕昭

水茎乃岡の葛葉も色つきて今朝うらかなし秋の初風

上句万葉十に。水くきの岡の葛葉も色付にけり。

万葉集にハ秋風のひゆるよふけて水茎の岡の葛葉も色付にけりとあり。葛葉の色なるへし。古今集に葛葉をよみ入たるか古歌をとりて法ならひ

蒹葭擬骨之同句ハ俗拾遺秋上ニ葛原王まく葛のうら風のうらがなしかる秋ハ来にけり。古今葛を葛葉とよみ入たること作者のわさ

之古歌によりうらハ葛の縁の詞なり。うらハ心の義なり。此ハうら物也しらぬ也。

越前

秋ハたゞ心よりおく夕露を袖のほかともおもひけるかな

四句よ袖といへるまで二三の句の心よりおこりて

涙なる事を見せて三句よ露といへるも四句の袖

の外を無縁のおもむきを見せたるなり。かやうの

所はよくきこえんがわかくなし。たゞれたるかしもなされど流さまの心は上下の受け合を宗

とやうなれどいとしもなし。又ハ詞の完備なるにて涙の事を心より出

る。袖の外といへるめでたき上の句よ袖といへるかな。

二三句の心より出る事ハ涙なるをいはせぬハはもあらず下句よ袖と

いへるより露といひて涙の事とハいひてあきらかなるよ

受け合ふ事を考へられよ。上の句よ露といひ下句よ袖といふくりの

本ハ涙の事をいはずを便りてよく歌人も学ぶべきなりたゞ古人

とかめそしらず

詠のよりハ一首のうちに秋の如くあるのしるきハたゞ物思ふ人

より

袖の

露なる秋をくいひてたゞといふ詞唯但の字の義にあらず。秋ハ心より

露涙の事ハもとより露ハ夕の上より出るものなれど

しかいふ詞よりて無縁の人ものをおもふ事よとこたへけり

これにて仏めでたき事こそたゞハ只の字の義俗よいふと云その心ハ秋ハや

後撰雑よ秋ハ袖より外よ

おくる露か。袖ならぬ外といふ詞の出所なり。

五十首歌奉りし時秋の歌　雅経

きのふまでよそに忍びし下荻の末葉の露に秋風ぞ吹く

二三の句よくきこえぬやうにて忍びてたるのをきき

下荻の風なり。下句末葉といひてはいへる当るべくハ

もとでらきて上句よそに忍びし下荻といへるよ

よくきこえたり。以上よく のこし。

題しらず　　西行

あはれいかに草葉の露のこぼるらん秋風立ぬ宮城野の原

秋風の立ぬるよりきて、草葉の露をいかにとおもひやる也。結句を初句へまはして、宮城野の原はあはれいかにとこゝろえべし。

四五一二三とつゞけてこゝろうべし。

崇徳院に百首歌奉りける時　俊成卿

みしぶつき植し山田にひたはへて又袖ぬらす秋はきにけり

本歌、萬葉八に、衣手にみしぶつくまで植し田を引板我はへまもれるくるし。衣手水渋つきて袖ぬれて植し田を

とて秋も又露に袖ぬるゝとよめる也。（引板とへてまもる田の事、しきの名なるを、これを）

そての涙の　すなはち　三ノ句をた、庵にねてもるはたをいへるのを

二ノ句までにかゝれるは、ひたはへ八袖ぬるゝとよめるを、ときかならずといふ非をつくせり。三ノ句いはそうろう、又ひたはへきいとあしきなり。其のこゝろ、みしぶつき袖ぬらして植し田をもるとて引板をはへて庵に寝て秋のよの露に、さらぞ露をいだして、又袖ぬるゝといへり。引板の秀句にて袖ぬらすといふ也。おのつから露に涙をてらしてあるへきにはあらず。それは此歌に見るべき事也。

袖ぬるゝとゝき詞なれども、この歌の秀句は引板にて水渋をもやしけるは、この歌のよみ方なり。本歌の詞なり。又ひとつの詞なれば、これまたとき詞ともいふべし。本歌の詞なり。おほかたの詞なれども、なくはいふべきなり。

題しらず　　後徳大寺左大臣

、夕されば荻の葉むけを吹風にことぞともなく涙落けり

二ノ句荻の葉を令向とそのくれしもぞ、なりしのてらるゝは、めつらしく、ことぞともなくは何のわけといふもなく也。

崇徳院に百首歌奉りし時　俊成卿

荻の葉も契りありてや秋風のおとづれそむるつまとなりけん

初句かくいふべきにあらず。もとハ秋風の荻の葉におとづれそむるも契ありての事にやといふことを、いひなし(かしこの説)ちぎりハ俗にいふ因縁也(契といふ詞の義なれバ昔の今生の縁ハあれどもさきの世よりの縁といふべき事といふ也)すなはち夫婦などいふにて、まして契りありてやといふ也(流布)

ちぎりハつまといふ詞によりて夫婦となる事也。その上ハ人のうへそハ昔世の縁があれバおのづからつまともなるを荻の葉も縁の有て秋風のおとづれそむるとき、わたしハ人のハ縁あれバつまとするときの世たるをはいふべき事なる也

題しらず　七条院権大夫

秋来ぬと松吹く風もしらせけりかならず荻のうは葉ならねど

うは葉ハ俗にあるらしといふこと也(俗にきこえていふ詞なり。上の句ハ秋が来たといふ)言外にみせけるハきしと荻の上葉の秋風の音といふにてもなく松風の音にも秋ぞしらせたりといふ也。二三の句ハならずとも荻のうは葉ならねど、詞なるべきをかくてハ一その眼となりてあしたし(此歌のこゝろを(?)[illegible])

百首歌に　式子内親王

うたゝねの朝けの袖にかはるなりならす扇の秋の初風

この歌つゞけて涼しき事なるべき所なるを不審也。句ハよくまとハ[illegible]て扇をならすハあつさをしのぐ[illegible]常にハうたゝねの袖の扇の[illegible]あつさ[illegible]別し扇の風が一夜のうちにうたゝねの朝の袖に秋の涼しき風とかはりしといふにて下句んたるべし。

なだらかの歌にて

俊成卿

梶の葉のこゝろは一首のうらの袋に秋かきし川なみの玉章

初二句ハ頭の字をすゑんために　此頃をたゝし二句三句へつゞくらむ料

露の玉章は梶の葉の縁ある也　こゝろみ入るゝと云ふ事也　ふみ料のくるまなり　浅拾

遺集に天の川とわたる舟のかぢの葉に　木の葉に書つらぬると云　云々

うらの木の葉に紙よりすく木の紙などにおもひはしてすくぬるゝ也　楮皮なる楮葉に

もいふなりてその梶の葉にかくとなりて紙は一葉の字にかよへる也　秋文をかよはしつらんとなり

百首歌中に　式子内親王

ながむれば衣手すゞし久方の天の川原の秋の夕ぐれ

ながむれば衣手すゞし　それハ天の川原の秋の気色なればやあらんと也

入道前関白太政大臣

いかばかり身にしみぬらんたなばたのつままつよひの天の川風

たなばたのまつよひにて　あまの川をわたる天の川風　身にしみてもありなんとの心ばへも見ゆる也

七夕のこゝろを　公経卿

ほしあひの夕すゞしき天の川もみぢの橋をわたる秋風

本歌　天の川もみぢを橋にわたせばや　たなばたつめの秋をしも待つ　けふはそのもみぢの橋のあるまじきてよまれたるなり

摂政太政大臣家五十首歌に　顕昭

萩が花ま袖にかけて高円のをのへの宮にひれふるやたれ

詞ハ　萩が花を袖にかけてといふ事　萩が花をま袖にかけるといふ　挿頭なる　たゞの袖まで

いとをかし　ふれふれわたるすみゐる　ひれハひれふる　なにゝもまた

うこきてそしき領巾顔巾とハ三尺の帛のるゐにて　衣の頸のあ

たりにつけたるもの　人の影をもしの料のやうにてなきき　[illegible]

便あれハ　これをふりしめ　[illegible]　一二のゝ文書ありて

けふの比のならひ　[illegible]　大殿なりしとおもひしと

千五百番歌合に　左近中将良平

夕されハ玉ちる野への女郎花まくらさためぬ秋風そ吹く

露を玉ちるといふこと珍らしけれ・露としいはで玉ちるとあるハげにさも有
ときはの一首の趣ハ玉ちる野の行人の袖のなみたにて・されと夕されハとて玉ちるハ
秋風といひ玉ちるといへるそ・露といふことハ聞ゆるにて玉ちるハ涙ち
るをよせたるか・四句ハ野のまくら定めへき所も定めすして野への花のいてき
たるす・五句秋風ハ露をあきしらす一首の意ハ女郎花とまれハ涙を
てきこえ入やうにみなしなかたとところかくれかさて・
露なき枕を定めかたき所とあきたるゆゑなれハと

入道前関白太政大臣右大臣に侍りける時百首歌よ
ミ侍りけるに　俊成

いとかくや袖ハしほれし野へに出てむかしも秋の花ハみしかと

一二の句ハいとかくハ袖のしをれさりしことゝ
見えて秋の花をみしかと袖の露をとふ

百首歌に　式子内親王

花すゝきまた露ふかしほにいてハなかめしと思ふ秋の盛を

本歌拾遺思ひのふかくなれハしのふれと出の宿秋の盛に
なりやしなまし秋のはてからにあらやとならましとハ穂よ
やもいさしといふことなり・さて歌のこゝろハ花薄をこれハまた
露ふかくいまたほにいてぬそいかなれハそ今ハまたき
ほにいてゝ見るへき・我もさてある事ハしと思ふ
秋の盛なるゆゑに露かしといへるにて穂よ
ほにいてゝ見るへき秋の物思ひもぞ添ふなれハ
て秋のはなをいへる詞也ともいふへきにせ

たかしくはあらぬにや。本歌にくらべてはおとりたり。たゞまきの秋のはかなきをよまれたるなり。
のこゝろ花すゝきは今ハトの草むらにかくるゝもかれんとするを、かならずみだるゝ秋の
はかなきを、まことにあはれなるてにをはにてよみいでたるなり。一二三四五にてつきたり。

摂政太政大臣家百首哥に　　八條院六條

のへことにおとつれわたる秋風をあたにもなひく花すゝき哉

人のまうでくることはなくて、ふく風ばかりおとつるゝにつけて、あだにもなびくよしをよせて、花すゝきにたとへたるなり。

此歌所歌合に翔草花通光卿

題しらず　　慈圓大僧正

よくきこえたる哥也。

ゆめぬとて埋へたる山に入花の路なきおくなる萩のした風

身にとまる思ひは荻の上葉にて夕暮の空
まつ秋の夕くれは荻の風の音をきゝつけてあはれは
なくへきを此哥にては其荻の風にはあらで身に
とまりたる秋のあはれは荻の風のことくにて夕暮は
かなしや。めでたくあはれに流れたり。釈切なれども初学の為にいふ。夕くれは又此寸土その主にてこゝろは荻は其れ
よく秋のあはれはこゝろ身にとまりて、それはまた荻にて風とし、の上葉の中にみちてはその夕くれになかれは此いふ
いはず秋ともいはずによぶとはまはげしき詞の外に
みちらせたるなり。秋といふ字なくても、あきらか風といふべし。かなしかはかなき夕くれの風といふは
詞つゞきすくれば又はまさに八寸へく危き所を得ずして云落さ、ぬるは世の風也。

百首歌に　　摂政

荻の葉にふくあらしの秋なるを待ける夜半のさをしかの声

秋なるをとハ秋の声としてきゝなせといふこゝろ也。一首あらしの秋と嵐とふくひてそれしきおよまる秋なるを也。一その意ハ嵐ハ荻の葉にふきてはやしき物を。又そのあらしのおとにさそはれて鹿も（はさきやしハヒとかをとハたす。萩の声も）又いとものかなしきを待るに。鹿も待る事よ。たのしまつらしきをもとめけるへし、声を待るものゝ夜半也。（待るハ鹿のうへにかけていへり。きく人のうへにハあらす。）秋なる声をいひもちて、ふかくきゝはやてもてなせる也。（初のいきおひいそしきの葉なるハヒとかいひたる也。一その意ハ風ハ萩の風をやらてし秋のあらしよそへてきくへきものなるを。しものさをしかハその声を待つけてなくよしと也。）

おしなへておもひしことのかすかすになほいろまさる秋のゆふくれ

おしなへてハ一つにおしくるめて也。（声ハもろもろの事にもおしくるめてといはむ。拾遺集しとろく。）秋ハいつも物かなしきものなれと。数々にハ今年おほくある物をもひとつにくるめて也。（秋ハいかにそや物かなし。拾遺集にハ一つもくれぬへき。ておもひの数とある也。）色ハかくる也。（色ハ衣といふ事。一その意。色ハ一つよ。みるめし恋しぬおもひの数々に秋ハ人物ものこりにし皆おもひの増るよし也。）一その意ハ常よりしたしき事。一つよおもしくるめしおもふのこなたに。秋の夕暮に。物ごとおもひの一つことにかなしき体の増るよし也。

題しらす

くれかゝるむなしき空の秋をみておほえすたまる袖の露かな

一二の句つき聞えず。（かれきたる空間にハあらねと。暮かゝるの句ハなほ。雑とすへきものすこしあらす。）四の句もいひなせす。（これハたまるといふ詞を。おもひそめたりとくはれ皆の類ある事にしてられす。）

秋のとりいはこの歌にあるとあるたとひなり。それハいとてあはれなるよ。
けしきのみよるはくはしく一途なる心のもたらしたるをくはしく思ひ知たる
答にてくれもよりて。
みちしめなる歌也。さてよくしもあらぬ哥之（下の句の難なれと）
うしに一その心ハあ（は）れなるなき空しきそれ
秋の夕くれをこそしてこそ。なきことのたまふとなり。

家の百首歌合に

ものおもはでかゝる露やは袖におくながめてけりな秋の夕暮

上句。ものおもはぬ人の袖よかゝる露ハおくまじ（かゝる露とハ紅の涙之けしきにてハなみだの思ひたるし意也）。まして
のちくものゝ心ハ（ながめ）みつる人もおもひのほどに同じことにみゆ。
四句ハおもひいるわけなくいふ事をなす。（いとかなしくゆゑん同じことよ。ながめ行てなるといふ心也）
（よしなき別義之同じをあはれなるしらるゝ、ことなきをしらハおもひなして詠るなる同じことよ。節ともいふ之。）すべて
なすまを二句よいふそかなはぬ体也ッハ詞をうへてねび（よ）みて

それときこゆるやうよしさへッのおもひ之。ことに趣ありしる悪
（ありいとハ私作の説也。先生ハ卓見にて。私作の説ハあるへからず不審その心おもしろくせ
ませるの紅なる露の袖に落にてハ秋の夕暮の哀さまよ。なにめでたるそうみゆる）
そのこゝろ詞をつゞけて哥よめる世にめづらし。

山路秋

行といふことを

慈円大僧正

み山路やいつより秋の色ならん見ざりし雲の夕暮の空。

いつよりのてふかくしいふ詞なかゝて下。くとりいひて（なくてかくハくをく
のゆきとは詞を立てゝ下秋の色ハすしよこゝろ
まなまし。くのかくみ雲しなるハしめしきるさき）題の路の字の字
のこゝろもはっきりす。すべて趣のかゝりぬ哥なり。（下同じ 彰る旨）
條秋風の袖に吹まく峰の雲をつゝ絶ようけて厂もなく之。（詠よ山路
を詠時の体まくあつまの歌も同じ趣にて。新勅よる作をとせる
なれバこれも山路をとり詠よこそしるらへといつくいそかゆるされけん
此ての歌の四句に作りし雲と云とまでうんかはしやうにて。それなる

色つきたる雲もみえそれは木草の紅葉にうつりて上のいつくも秋の色
なりけりときこゆる趣也。幽玄なる哥を深く味ひて看過すまてしかね
哥なりとは作者
のゐんぐゎうもなし。

題しらず　寂蓮

さびしさはその色としもなかりけり槙立山の秋の夕ぐれ

槙立山はいつも緑なる故紅葉もせず秋の色といふ事もなき也。秋なるらふは
やるかたなき秋の色はさびしさの色なり。一その色は槙立山の秋の夕ぐれにとゞめ
さびしさにつきては何れとて何のわる秋の色とてもなくて
それなるはさびしさと申していふべき所なりとぞ。

西行

心なき身にもあはれはしられけり鴫立沢の秋の夕ぐれ

鴫立沢は地名にあらず。

西行法師すゝめける百首歌に　定家朝臣

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれ

三夕の哥の中の一なるべし。ゆゑ世に名高しといひ、のとくなりみきはあつ
まる中に昔秋の夕ぐれのはかなきさまは、たゞそこはかとなくしみじみと
ろく思ひもみしまゝに、きこゆるとあはれとおもはれて、すべて此哥よ
りもまさりてきこえ侍。

さらにいへる事いくさもなく、あはれといひて
上句にはなもちもみぢもなきをめでゝ、あはれなるべき所よ見え
たるよ。見てもみればなかなか何の色もなくて、なき
所にてあはれなるといふ事をしられたる也。されど浦の苫屋の
秋の夕は花も紅葉もみるべきにあらず。ことにもの事なれ
ば、かく見わたして嘆ずべきうつくしさはなかるべき物を。浦の苫屋にや

わころの本すきあはしいそてはさめらるしなれん。磯浦えの櫻楓は
めいかくを失ひたりと總ア下はれしと云ふものやと月涼しの夕にして花
のなき八句の句のみかしらいまこそあへぬかよの所也。その言は浦のとま屋
の秋の夕暮を見渡せば花も紅葉もしき忘れておもはしきのしき
そとみ俗にいふ花ともぬる紅葉もくねとくかからの事也。こゝんとつ手
越の門のよりかなはれ浦のとま屋の秋の夕暮といへるあはれなるはすて
外ようれて
をゆるなり。ゑこそすこしはこゝにせは花も紅葉もなし。浦のとまやの九
屋の秋の夕暮しきてよきもし。或人へいへる。たゞ紅葉もなきかはりとして浦
のとま屋の花もこゝろのなき八句の句本よりと見えたる本なる花しも
もとより浮と見えたる紅葉の氣儀にいてそのや此二三の句を雄偉にて
出來接力ある花かなく浮と見えたる氣骨ありて見えたる
夕波せは花も紅葉も何もなし。彼波浮の哥の九屋の秋の夕暮はなくしてなきとはなし

五十首歌奉りし時

雅經

たへてやは思ひありともいかゞせむ葎の宿の秋の夕暮

初句調たらでとゝのはぬ也と。詞たりてよくとゝのひたり。一わたりいへば有餘不足
あるまじ。たゞ句作自在にて上下に並べたるなきここそおのがとりて
これは思ひわびもしなくていかにせんやといふ心のつきたる中うちゆきの
袖のせばきをもなとのたまひ、いかにせんともよくかなへりともしきこ
そ此かゝる事をなり。
え來りを並べてこのきて本歌にあつめてむすしあはれ
たえてやはすまへきとぞ。本歌はあるはいへるの宿をねぶし
はおもふべとおもひなきは葎の宿にも趣向するなれど秋の夕暮
のあはれしきにはやまあれたる宿に捨てかくしていかんや秋とおはしなくしき。

宮内卿

秋の哥とて

思ふことさしてそれとはなきものを秋の夕べを心にぞとふ
上下の句のよくかなしきはいひなす事をといふを
なべて此下にこゝろ得たらでとゝのはぬ哥なり。

此説のごとし。されど此歌にてハよまれしところ多くの歌に常をもおひ残
してむかしそのころをまうしてきうすることされぞくしきハいかにあるす
さもいふなりてそきこえたれど。ともし一ッらをかくれハ大かる
こもんなりてとくのひたる所也
此れ也　さしてもとかし　そよく此れ也

鴨長明

秋風のいたりいたらぬ袖はあらじたゞわれからの露の夕ぐれ

古歌よ。春のいたりいたらぬ里はあらじ　はなさくはなさかぬ花のさかりん。
これいたりいたらぬ袖もなしといふなりしりつる
き。秋風の袖までまるといふハ露之いたるも訓来の哉まで。たゞは
しうく涙の露ハおのれからしたることをいへども。又らくはちうかハめ入ハのうらき之
下句われからの露をつけてころへし。袖の露之一そ　のことハ秋風の誤也
此人の袖へハいたりいたらぬ此人の袖へハいたらぬ人もなくあはれ
一様なるべきをひとり我のこころは秋の夕ぐれあはれさまことなり

ならしな　らんとぞ。

西行

おほかたの秋ハいとはるゝ事あれどすゞしきものの夕まぐれかな

此歌は此ころの事を涼あるをいとよくきこえ
たるハ此上人の志卒なる風のうつわなり。

式子内親王

それながら昔にもあらぬ秋風にいとゞながめをしづのをだまき

初句ハ秋風のさま　うつりてはかなり。
此らハ本　昔にもあらぬ　わかれぬ
昔ハ二の句。秋風と昔の人の昔の事を
あらぬにつけて秋風の悲しきもまさりて
いとゞながめせらるゝとや
昔ながら昔のうつりを込めて　それも
しくなるこの一首の意ハ同し昔の秋風にて

なるに身のしらしにあはれなる秋風も昔にあはれなれとそいはく也
そへてあはれなるといふ也 秋風まてもしかしこあはれなりとそよむ也
あはれ秋風まとつきたる 結句昔にとよみなしたるものの也
さてめでたき詞なり
ならより聞こゆるなり 志川の春雄は上の句のむしにおもしろして一首
をしなる春興〈別にさ〉あるによある事

千五百番歌合に　通具

深草の里の月かけさびしさもすみこしままの野への秋風 昔すみこし里のままなるか

深草の里の月だに今まてこそ住し野への秋風の淋し
さも又もとのままなるとや 里の月かけさびし淋しさもあはれにて 情を下句の秋風をよく入れて
月のさびしさといふもあはれなるにあるを
まえいかのかしをそへてこれらを子細もなく淋しさもと
いへるかしこ月の昔のままなるといふことをきかせ
たる也 さるゆへことに用ひし淋しさこそ　月かけのさびしといふ

さらあはれ、三句かへつけんわろし。あの字は月かけと秋風とを
わたりふりてく下句をもちかけて
さ〈全き〉一首のさまは深草の里の月影の淋しさも住し野への
秋風の淋しさもおなじ事と為し侍りのまことく也

五十首歌奉りし時杜間月

俊成卿女

大あらきの杜の木のまをもりかねて人たのめなる秋夜の月

大あらきといふ名を木のまのあらきにとりて 只の句只 杜の名の
あらきといふ木のまの事のやうにて月のもる
へきやうにおもはせたる人たのめなるなり

守覚法親王家五十首歌に　家隆朝臣

有明の月まつ宿の袖の上に人たのめなるよひのいなつま

三四句にて袖によるつまのうつる月の影に
似てうつりまかふにて人たのめなる也

摂政家百首歌合に　有家朝臣

風わたる浅茅が末の露にだにやどりもはてぬよひの稲妻

やどりもはてぬは露の漂ふまでやどる也。露のちるまでやどらぬを漂ふといひては損日なる事のやうにきこゆ。風にちる露にはたまりもせぬゆゑ、すこしのやどりをも稲妻はえせぬよし也。

水無瀬にて十首歌奉りし時　通光卿

むさしのやゆけども秋のはてぞなきいかなる風の末にふくらむ

ゆけどもは行ども〱也。秋のはてなきとは秋の旅の心。はてなきむさし野のはてなき事をとり秋のはてぞなしとよめるところ、草の花虫の声などもはてなき也。はて様にはいはで一句よくかなへり。下句は詞あまりいふ。

みだれたりといふ也。

百首歌奉りし時月　慈円大僧正

いつまでか涙くもらで月は見し秋待ちえても秋ぞこひしき

結句、まちえても秋ぞこひしきといふ、一首の心をこめたり。又秋をまちえては涙くもりて秋の月のやうにもえぬ故、秋のさやかなる頃のこひしきといふ也。いかなれば涙にくもりてそのさかりの月をも見ずして、秋のやまひいふかひなき月をこひしといふ也。秋のさやかなる秋をこひしといふ也。

式子内親王

ながめわびぬ秋より外の宿もがな野にも山にも月やすむらん

本歌いつくら世よいかよしゝかくて山にわけもぞ
ふへりみれ、物句ハ月をめづるめでたる也、かなしきハおもひを
いそすぎ雨まへの秋の三ヶ月をこれ秋のかなしは花
まするつけてうかこの秋の月のすまぬ宿もある
とねらふ也 雨まへの秋の気しらぬ宿しるなあはれとねらふ也 月も半ばの一ッすがれとうく月をまつちれる哥子の際 下句
当れしいつくゝかれども秋なりぬ雨ハなく、いつこまも、
月もすゞしげあれらをやわれんと也 一首の意ハ 秋のおもひに
こひて秋よあらぬ宿ゐあはれしりてすむいへしと出まいる山も
月のすまぬ雨をあるまいくせんとをしと也 下句嵯峨山も八、世の
うけに隠れかくるすハ必嵯峨野芳野山 月すゞしといふハ、
ちかき山とおもひ入るまゝあれくもり
秋の興しらてめづるまことにたゞひよりをまて
らして物句へ月すゞしといふまでハ世結句へかゝらめ
こちらいふ事をひくり妙なるめでこれ上手のしわざ
すて、一ッのたゝみ也きんをめてこされハいくつきのあい
なし。この時代の歌ハ雄偉流麗豪壮新奇をもとめたるを考
しまれくどひく世をひくせよ翫したるゆゑあるすべて上下をかざと
遍し歌へ合するハ上下のそろはしくまかぬ用をすべて下手のしるさへる
盗て天骨すて接ぎられたる笑すべき世上を遠風の三多り、お接へてし
いつるまん氣既の及
ぶぬすのこなり。
題しら次
従三位頼政
ともれしも風をあすしめて芳野の山嶽の月を
月をこそあれおむるゆきまぼしやむる也宮句かくとい
ふへきをなるをゆるかすしたまの月をみるハ余なな

ることかのつらしきこゆ。月ともなくやあるまじき山にかくし
てかへすかふ法師のかくれよかし
へきりんとかりしゆかりの吉野の嶽といへ山林のすときさえ吉野の
奥ふかくいへ隠者の事ときこゆ。句のほにしくて吉野の
はてはてハ時代やありて当府のうたともいひうしよ
つとたくニそいうすへられん。粗ミあくあるハのせられす。

和歌所のうた合に湖辺月

家隆朝臣

にほの海や月の光のうつろへは波の花にも秋はみえけり

本歌 草も木も色かはれともわたつ海の波の花にそ秋なかりける。

百首歌奉りし時秋の歌 慈円大僧正

ふけゆかは煙もあらし塩竈のうらみなはてそ秋の夜の月

一首のこゝろハすきしのかハりハ塩かまの個まて月のかはりけれとし
やうゆうしもその倒しもありましかれハいつとなくとしふ也之。

題しらす 俊成女

ことわりの秋にはあへぬ涙かな月の桂もかはるひかりに

本歌 ちはやふる神のいかきにはふくすも。[illegible]
秋にはあへすうつろひにけり。

月の桂も 秋ハ猶もみちすれハや照まさるらん。ことこゝろハ二字ハさし二字の
歌のこゝろ なるほとりの秋ハ 此二首の古歌ハこの例しもて
あらたしきうつれる秋にある今しき
まことにしもあはれしさあるらし月の桂ハ紅葉よこそかはりて
されとおもひとさうらん涙の袖さんへすこしきこえいふてくきよはりなりし
此二首の本歌のこゝろよそこし流ゆる涙ハ古歌をとりて
古歌の詞をもろくさやしまつしきまちくふるなし。あへぬ
ねえ下る秋の歌の常しかハりて涙よはやかはる月
をそるよりてとふさうをかりてとせり。これを歌として
何もさすことしなる

せけんの事一その事八月の極のさこに秋ハ常よりもうらさびたるものまつよ。我涙も秋ハえちらへすして色かはりしなと波のさへのかゝるハ紅涙よ手より しまえ下句にかゝる光りもあるから上句みるところの秋をしひていひて涙のさ のかゝりてまきをせたるいさみの句ぞよそほひまさりて雄壮なる気象の中に大く 高手なより思ふしあることめでたけれ[illegible]いふとあはれなれ[illegible]二三 の句まある也諫帰に入られたり

なつめつねおもふ満しなかその月の宿との川とを此生

加陽 竹信

月の都ハくは月宮殿のまゝそれより月とや之月とら さ卯の霜より起てよあらば此卯をよみたるなり[illegible]たゝ月中の玉兎のもとへ二句末ふ此 卯もて月宮殿をおもひやる之誌句ハ此卯の満しきより きこえかの月宮殿のめくりの満しさいおもひやるとなり もろ人のさかしきようけて月宮殿のめくりの室の満しく 敵ならへきことをおもひやれる之此卯も不義ハあらず。

十首秋草よ附月花草花

摂政

露のまゝあられ小萩咲しなかまる庭の月ものつろふ かしわられ小萩ハ古ことの歌よみてよみしもある在ふ。 歌といひて歌しかとを上りたせて月ものつろふ とよめる之月くれもよみハこゝよりあらんよるなれ[illegible] あれとさ此ハ縦横なる風よきしたかひたるつるひ[illegible] 氣象よあり寺く付もあられ小萩古と冬をあらしとするいふくし。 大かたのうちのかゝさせんとそこそあるところくといひて本歌に の歌をさく八多く八漲るなしつかてくて月ものろふにある八玉梓 の川ふ小沖の歌まて此歌なとハあらいりんもるてふり[illegible]あるん。 さ歌ハ何のふしもおもはれて宿き[illegible]殊勝之此比古き[illegible]新 しきなさとなあらし歌家の比よめ[illegible] 此比の名家此た まさるかて附くるかるの手まふかり。

気しきなし。まことに雄偉なる哥なりとしるべし。

歌にかなふべき也。

建仁元年三月歌合に山家秋月

時しもあれ故郷人はおともせでみ山の月に秋風ぞ吹く

時しもあれとハ時こそあれ也。故郷人をおもふ折しもといふ事なり。

一首の心ハ山住にて故郷人を恋しく思ふ折しも、故郷人ハ音信もせで、み山の月に秋風のふきて、いとゞものおもはしき也。

八月十五夜和歌所歌合に深山月

深からぬ外山の庵のねさめたにさそな木の間の月はさひしき

たゝ外山のさとの　たとへは木の間の月を見ても心ほそく佛きすまひの心を　そへてよめり　吉野なれはいとゝさひしきこゝろ有　なけれはくはしくいひてはねさめの心なきはとよみきこえけれはよくきこゆる事
よりあはれなる此の哥　縦横なるあまりに至極この心の神の如く　めしあはれなるやうなるしかし時風として能ふ心あるのたくひを省き　言語絶してきゝすてにも猶心にほるゝはあるへくもあらす程これにとく

のひたらんを正心に　清きあはれのやくそくといふこと　しかれとも　はらく深きうやあはん　はらくのかく
りてすむところにはあるあはれなりくのかく法へし　あくまてよきなる哥
条中まで哀は神も独りにして此は清そくおもくさなき秋のなかのあはれをねらふあり

一 さて外山の庵のねさめに木の間の月をさへ佛しきこえきて　下句は山の庵のことなり
外山といふて深山ぬへし　上は深山ぬといふて外山の庵の住まゐをさへ侘しく
木の間の月さへもあはれしきに下句は木の間をいふて　深山の勝の深山のことをもさしよる計
への心の如きの本は佐者の本意はある　深山の月は　さそりたる
ゆへにふかく着つるすへしてさゆめし
へつさその心もかくもあらぬ外山の庵の秋のねさめのあはれにしきことはれ深
山のあはれの月をさそかくなるへきものとこゝろえよ　先生の説の如く

下句を外山の庵の事としては　然る哥はきゝあはれといへとも深山は何事
よそにていかく　三の句よりの残りたるを尽して下句を　さるなとお
外山の事と勢をもれたる一説也
しはらくよりしてなく下を深山の事ともいふすへきなれとも
此こゝろにては上句よりのつきゝよりなき也　三句の下よりのひ残
一説也　なる句ありとすへし

月前松風　寂蓮

月はなほもらぬ木の間も住吉の松をつくして秋風そふく

月の影をもらぬ雲のこのまでも悉く残さす秋風は
吹くるこゝろ也　松をつくしては面白し　句の心風流なる事まて尽へて此の句の
風流なるんとかねてきこしめさるへき

長明

なかむれはちゝにもの思ふ月にまたわか身ひとつの峰の松風

本歌すなはちこれにてよみ出せる也。はなれたる所ハ初二句本
歌のさまにて月ハ我身ひとつの月にあらず世中をかへて
てる月をすらちよとおもひしきまでのへ文之〕ひとつもた　らちかねと
述意之本歌ハたゞちにかくそうと
我身ひとつのとかとよりてかたらはず。　下句ハ山のおくに住ける人ハ我
し
ひとりかなしき峯の松風ハ我身ひとつの秋のやうに
そこ之〔一その意ハ世上秋しなべてゝる月をみれども月をこれハ我ひとりのやう
なすしくその人ハ文世上の人ハなき峯の松風をいよく
うきすしく之世上秋しなべてゝる月なれどもといふ
声ハ下句の我身ひとつといふよりいへるさ之。

山月

秀能

足引の山路の苔の露の上にねざめ夜ぶかき月を見るかな

旅寝の歌也。夜ぶかき月をみるとぞねられぬさまをあらはせり。

八月十五夜和歌所にて歌合侍りし時秋月

宮内卿

心あるをしも猶露のたもとか月やどれとはぬれぬものから

月やどれとてぬれたる袂ならねどもあはれにて月のやどりたれ
おのつゆあるはまことにいとゞ之〕月やどれとてぬれたるにハあらねども月
影やどりてあはれなる人のたもとゝ之〕。

宜秋門院丹後

忘れじな難波の秋の夜半の空こと浦にすむ月はみるとも

三句秋の月といふべきを月ハ下句にあるゆへ夜半の空とし
て下なる月をもひきあはせたる之〔世にハ空しきといふもそれぞて
月のすゑにハ是をふかくいふ八月と〕
ふかしの之かり之とほめあるらせたき気でし。上下の句の間へ今より後といふ事を

払てんうへし。一そのこゝろハいつくの浦よりも月さゆる夜ハ上寄る波の浦の秋のまことのあはれなりしきハ云ふまてもなし。

長明

松しまやしほくむあまの秋の袖月ハものおもふならひのミかハ

月の袖やこゝろハものおもふ人のならひのミかとおもへハそれのミならすしほくむあまの袖にもやとりしと也。

題しらす　七條院大納言

こととはむ野嶋か崎のあま衣波と月とにいかゝしをるゝ

波よりしほれたる袖に月のうつるなれハ月もしをるゝなり。

和歌所歌合に海辺月　家隆朝臣

秋の夜の月やをしまの天の原あけかたちかき沖のつりふね

明かた近き沖よりつりのこゆるかをしまの番の月をとしもてきつるやと也。流えたるを二三句にいひけのこりたるハ明かたにいひこめのきこえたるにしるし。めつらしきことはなるつきそれなる時にしたかふ拙き入しえとしもよく深きよもいへきこえ。

題しらす　慈円大僧正

うき身にハなかむるかひもなかりけり心にくもる秋夜の月

うき身にハ人のあはれなる秋の夜の月もそれなくてなかむるかひもなしと也。

通光卿

立田山よそにあらしのまくみえて雲まくもらぬき嶺の月影

三句まつハえ之払とかるる本ハひかことそ。三句ハ松の深きてハ上の句ち

かなし。又先といふなりしわまりたり。しらるゝを先とうらるゝハおもひの多くおもるをきゝいてゝ世上よしく此歌をいふ人あるものなれハあなの風をよろこしろ西つの方人のいひしまゝ言之大かゝるもさ此端ハ言ハ小しかして此歌ハまたりしといいて八骨なきさ歌也。此歌ハ立田山似つかりしけるやうなれとも。たとへあり月もあんも山なりハいつくの山なりとも何の似つかしからぬ事かあらんたゝかるうしならいて立田山をよみゐたる又あのまゝ由なり。しひて次此峯の立入りぬる月なるを立田山を西のかたなれとよせあり此歌必しも入りこの月とハ定めかたし月の哥之とこれを

東西南北の論もこゝまてハ不用なり。そのうへ新続九長ふなよめる雲の立田のやま此説のうへのなをさらの山ハよそくとあるよりて白雲の立田の山にかゝれとし。雲まハかうときと入る之山の端とは雲とはいへれハいつれの山なりとも定なるなて此文を作へきかハ新続古今よりて注せらるゝ誤なり。一首のさまハ秋の月とこゝに晩の雲まにかゝるかしてゝ古今序にもいへらく

ゆきまハ八方様の事をかわれとしゝこゝまて古ての序入りさかるしくをよりかわれとせる佐擦ゆくさまりなきハいかく。よく雲のかゝるわかれよりも以上不用之説より来りて歌をよく心得たれすへて古今古説も引きゝして解へくハあらねとよきゝふりしくとけハ霧の心も滞り物そしらぬものある事の之。ゆきさらかゝゆる清きよ夜まよ光ありの吹払へる夜よをそくこと次去よ此之此詞のからを夜まよあたりの吹ましうくをやゝよ必るときまて有へき之。雲ましうしとき之一そのさまハ立田山のたゝをよまるもあらしうかゝえ雲ハきえ払ハあらまれて雲ハ月よりとく払ハ月よ紛しとの之払のちりきすえ雲まものけわりよわれる体韵之。

殷富門院大輔

一 なかめつゝ秋のなかはも過ぬれはいかにふけゆく秋夜の月

秋のなかはゝ身の老ぬる事をたとふる之。来ん秋ハいかゝハり来いく世かハらん之。

式子内親王

宵の月はいでても猶入ぬべき月なり。ハ山端ちかきをハ物やハし
二三ノ句ハ。むきましてえ合てねらうき此の月なりと
といふ意なり。下句ハ山端ちかくうきふきて惜きを思ひ
ハせしとえけるハあまりわざや。みえる月もそのまにえ見
すてハねぶり日ゐよ今ゝ山端ちかくなりて惜きが思ひ
やまる事よしやゝめたり。
さるまゝなるむれてこそ出てかれ思ひすいけれ秋夜のこ
物おもひとをいふこゝをばめてもひゝゝせるよへしむる なり
とい山端のちかくえめ。物おもひつく見ゆるまで。物のひいれてひるまでなるむれは益
しられといふ意なり。思ひ入といふことを上へめぐらしてきくハころしなるといふぬをたゞおもは

とこしれたる孔なくなり。一首の心ハ秋の月を心あるまでも物思ひを
しみうるうらも月影までも此しきやうに山端のちかきものひ入べき
してよひのまゝ見るあ
までなるをよいことをなり。

五十首歌よませ侍りし時　摂政

雲はみなはらひ果たる秋風を松に残して月をみるかな

残るべき雲をも残さずして この詮のさやかなるをいそ
あるべき風を残しおくる也。かくのごとくいふときハ松にふく 不用之又ならずもせんり
よの月こそ風を残し益こそあるべき料に秋風のやどをかへる八月の
すそのへき料之。手きん秋風のやどをはらひて月のすそにかゝる風を
松に残して雲風をきくらんとすまし
つ晴ゝる夜の月もとゝる事なく。

家の月五十首に

月だにもなぐさめがたき秋の夜のこゝろもしらぬ松の風かな

月たにもなくはめくらきよハ秋の夜ハ月たところよりて
よそしはをもよほしてなくさめかたきこそあはれなるあらし
へいまの文のさまの　此説のとも一つあのさハ月もはのなきしはなう
しそれゆくさめかたき秋の夜なるにあまり
情よ松風も吹て人
とよそしむけとよ。

定家卿

はかなしや待宵の秋の風ふきて月をまつくらし此の橋姫
本歌ハさむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらむ宇治の橋姫と云　此歌も
いかりたるはおもかけならん秀をいふ比ありてはいゝく。秋の夜の
嵯峨や宇治の山なといふやかし　よそしれたる名の誰ありやハのの事五
月雨ふくときはれもあれ此説多くうつしや月をさしくを
とらめたる所みんとらんの字を
待てすまいとよとのいふ。又月のあへしらひの詞

あらまほし　剣なりしときはいてき事なり。秋の夜の月ところなる
弄の句なるよりさりしもなく新らしくなるやうにおもはしたるハ
身の毛たちてさかしくぬおあるをはなくりの英雄の
このまゝよのとまゝされけたる所論ハすすすかや。又はなしろや
とら、おなしせのあや難波江やなとくるとハゆかし
かくりてすゝしきこん哉。るやのやなる事そしらぬ洋。哉
しその論なれは更よいと事
人のこゝはかしろよまさ川夜の月をもらしきて更ゆく
新やらしの橋姫なをそてあるまし。この人を二三、句頭めとゝく
先生の執せられたるを除
都してふるゆくらやらしの橋姫と秀句ヨみかしたる半のはまよ。

五十首哥たてまつるに野亭月

摂政

りまもこ空もひとつ川のおとさまなかつの月影

上句は森は山なき宿に空と跡とつきてきゆるといふよし。下句は末は月と山のかくれなく山よりたかきのこるらんすれぬこそ。夢の葉のなる月はいとめでたしき也。ゆかしくんおそきけまくしめつくしきおもさすあらす。

雨後月　宮内卿

月をなほまつらん物か村雨の晴ゆく雲の末の里人

二句もちやすらんのよそわれて村雨のはれりといふあとこそ又やまと月をおもうことも偲ばれつ一その夜の村雨のこえしともわ宵くは見ことはれてりその月は浦きの色人は月をまちまちてやあかりんとなり。

題しらず　通具卿

秋の夜は宿かる月も露なから袖に吹こす荻のうは風

三句の心は月をさへ荻に風のふくといひしにて荻をそへて袖に流の露とも涼しく月のやどるを荻の上より吹きこしたるやうにいひなせる也。実に荻の葉を袖に吹こしたるかたなり。

源家長

秋のよしの宿かる影たけてなかはたかつ月に露ふかはかきのまへしらそてはの露をまちかけてとふ

此歌はよくめえ分たかつそおほてた

ほとくわとさかてくさしし

元久元年八月十五夜和歌所にて田家見月

前太政大臣

、風さゆる山田の庵でも月や月なるとむすぶ氷なるん

風さゆるハ下の氷といふ料なるへし山田の庵なる月が
手なるとみ氷のむすぶにありしまきゆるやらんとなり

和歌ハ泥に云今は田家月　慈鎮大僧正

尾のうへかしこのなきに宿とめて月ねぬる庵は月そこる哉

二句口ノ句もしそなりていふ、なくして宿とめていふ

一そこよ金石の響あり聞しておとけの析あふぞきしふハ謌のあり
んまんと思ふらくあへたまふりしハリしてまきえ三ロッくさなりたりんし何まる
あれん、これくのふかを例しでてまたくの析あふ歌もと入たまふりしく今もよ
むべきなりがきりをなて論く謌もるハ耐一般の風なりし善なき俳諧の泥
むのこまて不自在なわでとるよ愛さあてハ小田よかて愛のさあしなれといく
なる事もなしもうくいは歌ハ下句よおねの庵とある庵でくさもひらせしふ
田の庵よす愛の清めたる事なれ何のいくみなるりうあらんはていは歌一句のる
まんはしめし愛のさめたる趣なれをおねる夜といひくらしいぶくほれとられね
丹のふよねぬ夜とく毎夜ねぬよらしあす寸句のあよ
愛さあし塔の夜を眠らすして月をさくらる者なり

稲葉

稲葉あらく風をまかせてすしい庵も月まこころよかりありける　　俊成卿女

稲葉にて風のたえまなく吹渡る稲葉そしよまり世をて
ある人は独しわび寝してねざめかちなるとふ忍
のさぶる心はさまよねざめかなくありあ奇　あるも月をこそ
あれといふ月のすきまなかるやるこころよまていふハ常也
比流のころやくし風よまかせしや安しをれたるもして月かかると云義や
いさめをし比歌よ又の流あれとそれを自然雑せられたるめくよろかれハ川
寄せし歌ハいく雅なものであるなる流をなていたく三句を第一とめアして
ふるへし風よまかせさハ風よよろてといふす清て八月のなるく熱ささハうかく
たるへし、まかせてと折りくるるへか寸一そのるハ山田の庵ハ稲葉ふく風の故
よ月もされて稲葉ハ月ふりみをしてあさなるれまも月あかりありすくなる

鶉しらむ

あくかれて袖ぬれ夜の庭のつもりまて月よけはぬ床のさ筵

月もしく月ならまし（そのさ月にあくかれてよるもすから袖ぬれ床の狭筵に庭のつもりまて拂ふわる月とさせ給ふなり。

百首歌奉りし　秋の歌　式子内親王

秋のいろハまかきにうとくなりゆけと手枕なるゝねやの月影

上の句ハ籬なる千種の花のさかりもやうやう次第に月の比ハやみなむわて手枕なるゝ比て千種の花も月も秋の千種の色も絶ぬるとなれハもはや枕もなるゝといふ心をなからへて別るゝなるをたのむなり。

秋の歌の中に　太上天皇御製

秋の露や袂にいたく結ふらん長き夜あかす宿る月かな

長き夜あかす終夜たゆます月のあかるまてと也。

千五百番歌合に　通光卿

けふまて文ハ我たのめのゆふくれの月ハつれなき秋のよの空

とはてあかなるもけふまて文字なとたのみし月をさそふよと家夜のあかるまてかり月ハいまたいてしと待わふに夜のあかるゝをしき時

小夜ふくるまて

攝家て家の歌合に暁月　二條院讃岐

大かた秋のねさめの露けくハ又たか袖にあり明の月

大しあんなくてハ世の人のいふ事なれハおほくかく我こと

袖のおほくハ文といふまて我袖に月のやとれるをいふ也

せうゝすゝむるくはなるにこそなれ、しけりしを上下せりしこと、い
ひておもしろき事するそ哥のいろきなる。一首の意は世上一統に秋の哀をあはれきはむる八方の月。
ふかき心ある文脈をとりてよめりてあるもやむへからず。ねかひよき句の月はいとゆゝしけあはれなり。

五十首歌奉りし時　雅経

はらひかねさこそ露のしげゝらめやどるか月の袖のせばきに

二三句のてにをは普通にて、心えときやすけれど、例
をしらぬ人の玉の緒よあし句の哥ぞてにはあるのしく
れんとしたるこゝろなき心なり二三句は法のことし初句も此句は下の袖に続く哥をとなりふかきにも文意てはいとなるの結句の迷悩
なるべし。て四句月の宿るといふを詞を下上にせるもてあそふ
わきがたくて、めでたし。下句袖のせまきよ月のやどるといふは結
三段に寄らへしたるは四句のこゝろある文。

句せばき袖なるにといふべきを、にかへて、かくいひし。五句を四句ともしていひ残しなる
やうによみいれたる哥なり。とまりといふ所にさぞ袖のせばきに月の
やどるといふべきを、みだれてかりにかきなしたるのつゞき、ほかはれいを
やめたるふ人は今しとあるならひ、此の心もある句は五句袖のせく
きよしく哥の数寄なるにこそ迷惑の哥にてとらへ又此哥は迷惑の
意は此句をたゞ例ともて袖月の宿るとにて八せはきとふかしを論
なしうき哥するいふかなる奥あるもの疎漏に看るさまなり。一首のさ
はぢらひまでいふよ哥のしらべにもさておもはるゝなるを
よ御ても、やどるか月の袖のくせばきことなり。
一そのさまは下句にも又此哥にてはあるらいふにあらうひまるなるにてせはき袖に
中にかゝりしとの官位とすまするにもおもひてさとり給て深く歎きとす
事なきやの
こゝろなり。

愛知県
1105052470
911
イ
2-2-1